

研究のエコシステムと評価： 人系研究の評価に関する論点地図ver.2へ向け

○藤川二葉¹ (fujikawa@kura.kyoto-u.ac.jp), 佐々木 結¹, 押海 圭一², 新澤 裕子³, 平澤 加奈子⁴
 (1. 京都大学学術研究展開センター, 2. 人間文化研究機構, 3. 東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室, 4. 東京大学史料編纂所)

概要

2022年9月、人文社会科学系URAネットワークは、URAと研究コミュニティの間で公正で責任ある研究評価についての認識を高め、対話の場を作ること、またこれまでに蓄積されてきた議論を踏まえ、堂々巡りに陥らずに一步踏み出すことを目的とし、助成金DORA Community Engagement Grantsを得て「人文・社会科学系研究の評価に関する論点地図Ver.1」を作成した。本ポスター発表では、URAを中心とした様々なアクターから地図へのコメントを収集し、その過程で得られた「この地図の活用方法を提示すべき」というコメントに応じURAによるユースケースの例をあわせて記載した。さらにポスター発表会場でもコメントを追記してもらうことで、地図のバージョンアップに向けた対話の場をポスター上に作り、議論のネットワークを広げるとともに、研究のエコシステムを豊かにする評価に向けた方策について考察する。

背景/問題提起

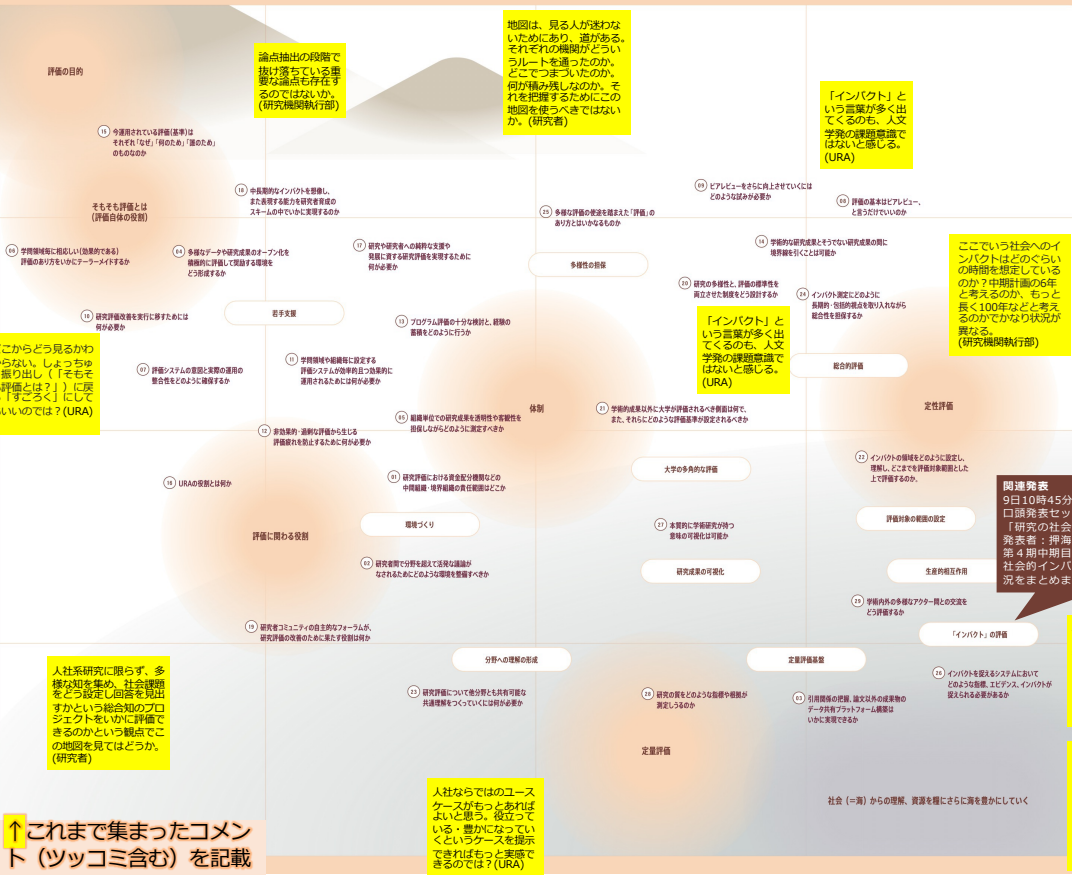
容易な回答が得られない人系研究評価の議論では、堂々巡りに陥りがちである。2023年1月、人文学・社会科学特別委員会*がいわゆる「人系モニタリング指標」に関する検討結果をまとめた。あくまで研究評価指標という位置づけではないと断った上で、「人文学・社会科学分野の研究活動を一定程度可視化し、関連する政策効果の測定を図る」を目的で、国際・国内ジャーナル論文等（学会誌、大学紀要を含む）、プレプリント、書籍などがモニタリングの対象とされた。その後、これまでデータが十分に蓄積されて来なかった書籍について、把握手法が模索されている。しかし、そもそも政策効果を測るのに、論文や書籍といったアウトプットを追うことが効果的なのか。可視化することが目的の一つであれば、定量的な指標にこだわらず定性的な指標もあり得たのではないか。これらの指標によるモニタリングが継続した場合、研究のエコシステムに不均衡が生じないと言えるだろうか。疑問が生じたときに立ち止まって考えるヒントが、この地図に散りばめられている。

*文科省科学技術・学術審議会 学術分科会 人文学・社会科学特別委員会

会場のあなたのコメント、ツッコミ、入れてください！

Issue Map on Research Assessment in the Humanities and Social Sciences

Ver.1



人系に限らない論点になっていて、かえって人系特有の議論は埋められていない。(URA)

どういったコンセプトでこの地図が作られたのか分かりたい。(URA)

評価の研究の論点はこれで尽きていると思う。前回は、これをどうようにしていくか？(URA)

評価の論点整理だけでなく、理解醸成のための取組があるよ。(URA)

ドメスティックな評価なのか、国際的な評価なのか。(URA)

「大学の現場に降ってくる評価のニーズ」に対して応じているかどうか？(URA)

2次元マップにする必要はあったのか？2層を設定できなかったのか？(URA)

論点抽出の段階で抜け落ちている重要な論点も存在するのではないか。(研究機関執行部)

地図は、見る人が迷わないようにあり、道がある。それぞれの論点とどういったルートを通ったのか、どこまで進んだのか、何が積み重なったのか、それを把握するためにこの地図を使ってみてほしい。(研究者)

「インパクト」という言葉が多く出てくるのも、人文学界の課題意識ではないか。(URA)



「研究計画に関するライデン声明」とこの地図を併用して読みかき、欠けている論点をデータベースを確認することで、日本の空白地帯が見える。それは人系分野の分野についてもあてはまる。(研究者)

この地図は海外の論文が対象になっていない。海外の状況はほとんど見えない。パイロットの実験しているところもある。総合知の議論をするときにこの部分はあるといい。(URA)

研究者が話す個別論点に焦点があたりやすい。特に申請などの場合には論点が明確になりやすい。「学術的でない」とも「社会的でない」を立てることも有効かもしれない。(URA)

人系系の研究評価という視点で作成されたが、具体的に他の分野に適用していくのか、というところもどうにか考えたい。社会的インパクトという視点では、人系系以外の分野が重要という意識が他分野にはある。(URA)

↑これまで集まったコメント(ツッコミ含む)を記載

地図のユースケース (この地図、一体どう使う?)

ケース①新米URAの場合 (例)

URAとして着任してまだ日が浅い。定量的評価では人系研究が適切に評価されないという問題があり、それは研究の発展にも関わる重要なことで、どうやら色々な議論がすでに行われているようだ。研究支援者として自分は一体何ができるのだろうか？それ考えるためにも、まずは全体像を把握したい！

ケース②部局URAの場合 (例)

部局における評価は外から求められて作成する場面が多く、「受動的」になりがち。さらに、評価観点が依頼元より異なることが作成業務の複雑さを招くことに…(泣)。部局側が主体的に自分たちの強みを評価に位置付けると何が変わる…かも？

ケース③本部URAの場合 (例)

…論点を並べたことで、組織の議論になじむ/なじまないもの何となくわかった。「何だったら定量的に見ることが出来るか？」に終始しがちな組織の議論を、戦略的に進めるための道筋設計や確認に使えるかも…？(以下は例)

考察・これからの課題

俯瞰図としては一定の価値が認められつつも、日々の業務の中で、考えを整理し行動に結びつけるのは容易ではない。ユースケースを増やしつつ、研究のエコシステムの1つのツールとして、より使いやすしい形へ、論点の精査と

充実が必要。「責任ある測定 (Responsible Metrics)」の5原則の1つ、「省察性」(Reflexivity: 指標がもつ潜在的かつシステム上の効果に応じた更新)が示唆するように、目標を見失わず容易に結論を出さず省察を促すものへ。